

ヘンゼルとグレーテル

HANSEL UND GRETEL

グリム兄弟 Bruder Grimm

青空文庫

まずしい木こりの男が、大きな森の近くにこやをもって、おかみさんとふたりのこどもとでくらししていました。ふたりのこどものうち、男の子がヘンゼル、女の子がグレーテルといいました。しがなくくらしして、ろくろく齒にあたるたべものを、これまでもたべずに来たのですが、ある年、国じゆうが大ききんで、それこそ、日日のパンが口にはいらなくなりしました。木こりは、晩、寢床ねとこにはいったものの、こののち、どうしてくらすかかんがえると、心配で心配で、ごろごろ寝がえりばかりして、ためいきまじりに、おかみさんに話しかけました。

「おれたち、これからどうなるというんだ。かわいそうに、こどもらをどうやってくわしていくか。なにしろ、かんじん、やしなつてやっているおれたちふたりの、くうものがないますつだ。」

「だから、おまえさん、いつそこうしようじやないか」と、おかみさんがこたえました。

「あしたの朝、のつけに、こどもたちをつれだして、森のおくのおくの、木こぶかい所まで

行くのだよ。そこで、たき火をしてやって、めいめいひとかけずつパンをあてがっておいで、それなりわたしたち、しごとのほうへすつぽぬけて行って、ふたりはそっくり森の中においてくるのさ。こどもらにかえり道が見つかりつこないから、それでやつかいがぬけようじゃないか。」

「そりゃあ、おめえ、いけねえよ。」と、木こりがいいました。

「そんなことあ、おれにはできねえよ。こどもらを森の中へおきざりにするなんて、どうしたつて、そんなかんがえになれるものかな。そんなことしたら、こどもら、すぐと森のけだものがでてきて、ずたずたにひつつあいてしまふにきまつてらあな。」

「やれやれ、おまえさん、いいばかりだよ。」と、おかみさんはいいました。「そんなことをいつていたら、わたしたち四人が四人、かつえ死にに死んでしまつて、あとは棺かん桶おけの板をけずつてもらうだけが、しごとになるよ。」

こうおかみさんはいつて、それから、のべつまくしたてて、いやおうなしに、ていしゆを、うんといわせてしまいました。

「どうもやはり、こどもたちが、かわいそうだなあ。」と、ていしゆはまだいっていました。

ふたりのこどもたちも、おなががすいて、よく寝つけませんでしたから、ママ母が、おとつあんにむかつていつていることを、そっくりきいていました。妹のグレーテルは、涙をだして、しくんしくんやりながら、にいさんのヘンゼルにむかつて、

「まあどうしましょう、あたしたち、もうだめね。」と、いいました。

「しッ、だまってグレーテル」と、ヘンゼルはいいました。「おさわぎでない、だいじょうぶ、ぼく、きつとよくやってみせるから。」

こう妹をなだめておいて、やがて、親たちがねしずまると、ヘンゼルはそろそろ起きだして、うわぎをかぶりました。そして、おもての戸の下だけあけて、こっそりそとへ出ました。ちようどお月さまが、ひるのようにあかるく照っていて、うちの前にしいてある白こじやりい小砂利が、それこそ銀貨ぎんかのように、きらきらしていました。ヘンゼルは、かがんで、その砂利じやりを、うわぎのかくしいっぱい、つまるだけつめました。それから、そつとまた、もどつて行つて、グレーテルに、

「いいから安心して、ゆつくりおやすみ。神さまがついていてくださるよ。」と、いいきかせて、自分もまた、床とこにもぐりこみました。

夜があけると、まだお日さまのあがらないうちから、もうさつそく、おかみさんは起き

て来て、ふたりをおこしました。

「さあ、おきないか、のらくらものだよ。おきて森へ行つて、たきぎをひろつてくるのだよ。」

こういつて、おかみさんは、こどもたちめいめに、ひとかけずつパンをわたして、
「さあ、これがおひるだよ。おひるにならないうち、たべてしまうのではないぞ。もうあとはなんにももらえないからよ。」と、いいました。

グレーテルは、パンをふたつともそっくり前掛の下にしまいました。ヘンゼルは、かくしにいつぱい小石を入れていましたからね。

そのあとで、親子四人そろつて森へ出かけました。しばらく行くと、ヘンゼルがふと立ちどまつて、首をのぼして、うちのほうをふりかえりました。しかも、そんなことをなんべんもなんべんもやりました。おとつあんがそこでいいました。

「おい、ヘンゼル、なにをそんなに立ちどまつて見ているんだ。うっかりしないで、足もとに気をつけろよ。」

「なあに、おとつあん。」と、ヘンゼルはいいました。「ぼくの見ているのはね、あれさ。ほら、あすこの屋根の上に、ぼくの白ねこがあがっていて、あばよしているから。」

すると、おかみさんが、

「ばか、あれがおまえの小ねこなもんか、ありやあ、けむだしに日があたってあるんじゃないか。」と、いいました。でも、ヘンゼルは小ねこなんか見ているのではありません。ほんとうはそのまに、れいの白い小砂利こじやりをせつせとかくしから出しては、道におとしおとししていたのです。

森のまん中ごろまで来たとき、おとつつあんはいいました。

「さあ、こどもたち、たきつけの木をひろつておいで。みんな、さむいといけない。おとつつあん、たき火をしてやろうよ。」

ヘンゼルとグレーテルとで、そだをはこんで来て、そこに山と積つみあげました。そだの山に火がついて、ぱあつと高く、ほのおがもえあがると、おかみさんがいいました。

「さあ、こどもたち、ふたりはたき火のそばであつたまつて、わたしたち森で木をきつてくるあいだ、おとなしくまつているんだよ。しごとがすめば、もどつてきて、いっしょにつれてかえるからね。」

ヘンゼルとグレーテルとは、そこで、たき火にあたっていました。おひるになると、めいめいあてがわれた、パンの小さなかけらをだしてたべました。さて、そのあいだも、し

じゆう木をきるおのの音がしていましたから、おとつつあんは、すぐと近くでしごとをしていることばかりおもっていました。でも、それはおのの音ではなくて、おとつつあんが一本の枯れ木に、枝をいわいつけておいたのが、風でゆすられて、あっちへぶつかり、こっちへぶつかりしていたのです。こんなふうにして、ふたりは、いつまでもおとなしくすわって待っているうち、ついくたびれて、両方の目がとろんとしてきて、それなりぐつすり、ねてしまいました。それで、やっと目がさめてみると、もうすっかり暮れて、夜になつていました。グレーテルは泣きだしてしまいました。

「まあ、わたしたち、どうしたら森のそとへ出られるでしょう。」と、グレーテルはいいました。

ヘンゼルは、でもグレーテルをなだめて、

「なあに、しばらくお待ち。お月さまが出てくるからね。そうすればすぐと路が見つかるよ。」と、いいました。

やがて、まんまるなお月さまが、高だかとのぼりました。そこで、ヘンゼルは小さい妹の手をひいて、小砂利をおとしたあとを、たどりたどり行きました。小砂利は、吹き上がって来たばかりの銀貨ぎんかみたいのに、ぴかぴか光って、路しるべしてくれました。ひとばんじ

ゆうあるきどおしにあるいて、もう夜のしらしら明けに、ふたりはやつとおとつあんのうちにかえつて来ました。ふたりがおもてをこつこつとたたくと、おかみさんが戸をあけて出てきました。そして、ヘンゼルとグレーテルの立っているのを見ると、

「このろくでなしめら、いつまで森中で寝こけていたんだい。おまえたち、もううちにかえるのがいやになったんだとおもっていたよ。」と、いいました。

おとつあんのほうは、でも、ああして子どもたちふたりつきり、おきざりにして来たものの、心配で心配でならなかったところでしたから、よくかえつて来たといつてよろこびました。

そののち、もうほどなく、うちじゆうまた八方ふさがりになりました。子どもたちがきいていると、夜おそく、寝ながらおつかさんが、おとつあんにむかって、

「さあ、いよいよなにもかもたべつくしてしまつたわ。天にも地にもパンが半きれ、それもたべてしまえば、歌もおしまいさ。こうなりやどうしたつて、こどもらを追いだすほかはないわ。こんどは森のもつとおくまでつれこんで、もう、とてもかえり道のわからないようにしなきゃだめさ。どうしたつて、ほかにわたしたち助かりようがないからね。」

こんなことをいわれて、ていしゅは胸にぐつと来ました。そして、

（そんなくらいならいつそ、てめえ、しまいのにこったじぶんのぶりのひとかけを、こどもたちにわけてやっちまうのがましだ。）と、かんがえました。

それでも、おかみさんは、ていしゆのことを、まるで耳に入れようともしません。ただもういきりたつて、あくぞもくぞならべたてました。それはたれだつて、いったんA^{アイ}といつてしまえば、あとはB^{ベエ}とつづけなければならなくなるので、このていしゆも、いちどおかみさんのいうままになったからは、こんども、そのとおりにしなければならなくなりました。

ところで、こどもたちはまだ目があいていて、この話をのこらずきいていました。そこで、おとなたちの寝てしまうのを待ちかねて、ヘンゼルはおきあがると、そとへとび出して、この前のように小砂利をひろいに行こうとしました。でも、こんどは、おかみさんが戸に、ぴんと、じょうをおろしてしまったので、ヘンゼルは出ることができなくなりました。

ヘンゼルは、それでも、小さい妹をなだめて、

「グレーテル、お泣きでない。ね、あんしんしてお休み。神さまがきつとよくしてくださいあるから。」と、いいきかせました。

あくる日は、朝つぱらからもう、おかみさんはやって来て、子どもたちを寢床ねどこからつれだしました。子どもたちは、めいめいパンのかけらをひとつずつもらいましたが、それはせんものよりも、よけい小さいものでした。それをヘンゼルは、森へ行く道みち、かくしの中ではぼろぼろにくずしました。そして、おりおり立ちどまっては、そのくずしたパンくずを、地びたにおとしました。

「おい、ヘンゼル、なんだって立ちどまって、きよろきよろみているんだな。」と、おとつつあんがいました。「さつさとあるかないか。」

「ぼく、ぼくの小ぼとを、ちゃんとみているんだよ。そら、屋根の上にとまって、ぼくにさよならしているんじゃないか。」と、ヘンゼルはいました。

「ばか。」と、おかみさんはまたいきました。「あれがなんではともんか。あれは朝日が、けむだしの上で、きらきらしているんだよ。」

ヘンゼルは、それでもかまわず、パンくずを道の上におとしおとしして、のこらずなくしてしまいました。

おかみさんは、子どもたちを、森のもつともつとふかく、生まれてまだ来たことのなかつたおくまで、引っぱって行きました。そこで、こんども、またじゃんじゃんたき火をし

ました。

そしておつかさんは、

「さあ、こどもたち、ふたりともそこにじつといればいいのだよ。くたびれたらすこし寝てもかまわないよ。わたしたちは、森で木をきつて来て、夕方、しごとがおしまいになれば、もどつて来て、いっしょにうちにつれてかえるからね。」と、いいました。

おひるになると、グレーテルが、じぶんのパンを、ヘンゼルとふたりで分けてたべました。ヘンゼルのパンは道にまいて来てしまいましたものね。

パンをたべてしまうと、ふたりは眠りました。そのうちに晩もすぎましたが、かわいそうなこどもたちのところへ、たれもくるものはありません。ふたりがやっと目をあけたときには、もうまつくらな夜になっていました。ヘンゼルは、小さい妹をいたわりながら、「グレーテル、まあ待つておいでよ。お月さまが出るまでね。お月さまが出りやあ、こぼしておいてパンくずも見えるし、それをさがして行けば、うちへかえられるんだよ。」と、いいました。

お月さまが上がったので、ふたりは出かけました。けれど、パンくずは、もうどこにも見あたりません。それは、森や野をとびまわっている、なん千ともしれない鳥たちが、み

んなつついてもって行ってしまったのです。それでも、ヘンゼルはグレーテルに、「なあにそのうち、道がみつかるよ。」と、いつていましたが、やはり、みつきりませんでした。夜中じゆうあるきとおして、あくる日も朝から晩まであるきました。それでも、森のそとに出ることができませんでした。それになしろ、おなががすいてたまりませんでした。地びたに出ていた、くさいちごの実を、ほんのふたつ三つ口にしただけでしたものね。それで、もうくたびれきつて、どうにも足が進まなくなつたので、一本の木の下にごろりとなると、そのままぐっすり寝こんでしまいました。

二

こんなことで、ふたりおとつつあんの小屋を出てから、もう三日めの朝になりました。ふたりは、また、とぼとぼあるきだしました。けれど、行くほど森は、ふかくばかりなつて来て、ここらでたれか助けに来てくれなかつたら、ふたりはこれなりよわりきつて、たお倒れるほかないところでした。

すると、ちようどおひるごろでした。雪のように白いきれいな鳥が、一本の木の枝にと

まって、とてもいい声でうたっていました。あまりいい声なので、ふたりはつい立ちどまって、うっとり聞いていました。そのうち、歌をやめて小鳥は羽ばたきをすると、ふたりの行くほうへ、とび立って行きました。ふたりもその鳥の行くほうへついて行きました。すると、かわいいこやの前に出ました。そのこやの屋根に、小鳥はとまりました。ふたりがこやのすぐそばまで行ってみますと、まあこのかわいいこやは、パンでできていて、屋根はお菓子かしでふいてありました。おまけに、窓はびかびかするお砂糖さとうでした。

「さあ、ぼくたち、あすこにむかって行こう。」と、ヘンゼルがいました。「けっこうなおひるだ。かまわない、たんとごちそうになろうよ。ぼくは、屋根をひとかけかじるよ。グレーテル、おまえは窓のをたべるといいや。ありやあ、あまいよ。」

ヘンゼルはうんと高く手をのぼして、屋根をすこしかいて、どんな味がするか、ためしってみました。すると、グレーテルは、窓ガラスにからだをつけて、ぼりぼりかじりかけました。そのとき、おへやの中から、きれいな声でとがめました。

「もりもり　がりがり　かじるぞ　かじるぞ

わたしのこやを　かじるな　だれだぞ。」

子どもたちは、そのとき、

「かぜ かぜ

そうらの子。」

と、こたえました。そして、へいきでたべていました。ヘンゼルは屋根が、とてもおいしかったので、大きなやつを、一枚、そっくりめくつてもって来ました。グレーテルは、ま
るい窓ガラスを、そっくりはずして、その前にすわりこんで、ゆつくりやりはじめました。
そのとき、ふいと戸があいて、化けそうに年とったばあさんが、しゅもく杖にすがって、
よちよち出て来ました。ヘンゼルもグレーテルも、これにはしたたかおどろいたものです
から、せつかく両手にかかえたものを、ぽろりとおとしました。ばあさんは、でも、あた
まをゆすぶりゆすぶり、こういいました。

「やれやれ、かわいいこどもたちや、だれにつれられてここまで来たかの。さあさあ、は
いって、ゆつくりお休み、なんにもされやせんからの。」

こういつて、ばあさんはふたりの手をつかまえて、こやの中につれこみました。

中にはいると、牛乳ぎゅうにゅうだの、お砂糖さとうのかかった、焼きまんじゅうだの、りんごだの、くるみだの、おいしそうなごちそうが、テーブルにならばりました。ごちそうのあとでは、かわいいきれいなベッドふたつに、白いきれがかかっていました。ヘンゼルとグレーテルとは、その中にごろりとなつて、天国にでも来ているような気がしていました。

このばあさんは、ほんのうわべだけ、こんなにしんせつらしくしてみせましたが、ほんとうは、わるい魔女まじよで、こどもたちのくるのを知つて、パンのおうちなんかこしらえて、だましておびきよせたのです。ですから、こどもがひとり、手のうちに入はいつたがさいご、さつそくころして、にてたべて、それがばあさんのなによりうれしいお祝い日になるというわけでした。魔女は、赤い目をしていて、遠目とつめのきかないものなのですが、そのかわり、けものように鼻ききで、人間が寄よつてきたのを、すぐとかぎつけます。それで、ヘンゼルとグレーテルが近くへやってくると、ばあさんはさつそく、たちのわるい笑い方をして、「よし、つかまえたぞ、もうにげようつたつて、にがすものかい。」と、さもにくてらしくいいました。

そのあくる朝もう早く、こどもたちがまだ目をさまさないうちから、ばあさんはおきだ

して来て、ふたりともそれはもう、まっ赤かにふくれたほつぺたをして、すやすやと、いかにもかわいらしい姿で休んでいるところへ来て、

「ごいつら、とんだごちそうさね。」と、つぶやきました。

そこで、ばあさんは、やせがれた手でヘンゼルをつかむと、そのまま小さな犬ごやへはこんで行って、ぴっしやり格子戸こうしどをしめきつてしまいました。ですからヘンゼルが、中でいくらわめきたいだけわめいてみせても、なんのやくにもたちません。それから、ばあさんは、またグレーテルの所へ出かけて、むりにゆすぶりおこしました。そうして、

「このなまけもの、さあおきて、水をくんで来て、にいさんに、なんでもおいしそうなものを、こしらえてやるんだ。そとの犬ごやに入れてあるからの、せいぜいあぶらぶとりにふとらせなきや。だいぶ、あぶらののつたところ、おばあさんがたべるのだからな。」と、わめきました。

こうきいて、グレーテルは、わあつと、はげしく泣き立てました。けれどなにをしたつてむだでした。このたちのわるい魔女のいいなりほうだい、どんなことでも、グレーテルはしなければなりませんでした。

こんなしで、きのどくに、たべられるヘンゼルには、いちばん上等なお料理がつき

ました。そのかわり、グレーテルには、ザリガニのこうらが、わたったばかりでした。

まい朝まい朝、ばあさんは犬ごやへ出かけて行って、

「どうだな、ヘンゼル、指をだしておみせ。そろそろあぶらがのって来たかどうだか、みてやるから。」と、わめきました。

すると、ヘンゼルはたべあましのほそっこい骨を、一本かわりに出しました。ところで、ばあさんはかすみ目しているものですから、見わけがつかず、それをヘンゼルの指だともって、どうしてヘンゼルにあぶらがのってこないか、ふしぎでなりませんでした。

さて、それから、かれこれひと月たちましたが、あいかわらずヘンゼルは、やせこけたままでした。それで、ばあさんも、とうとうしびれをきらして、もうこの上待ちきれないとおもいました。

「やいやい、グレーテル。」と、ばあさんは妹の子にむかってわめきたてました。「さあ、さっさと行って、水をくんでくるのだ。ヘンゼルのごぞうめ、もうふとっていようが、やせていようが、なにがなんだって、あしたこそ、あいつ、ぶつちめて、にてくつちまうんだからな。」

やれやれ、どうしましょう。かわいそうに、この妹の子は、むりやり水をくまされなが

ら、どんなにはげしく泣きじやくったことでしょう。

「神さま、どうぞお助けくださいまし。」この子はさけび声をあげました。「いつそ森の中で、もうじゆうにくわれたほうが、よかつたわ。それだと、かえってふたりいっしょに死ねたのだもの。」

「やかましいぞ、このがきやあ。」と、ばあさんはいいました。「泣いたってわめいたって、なんにもなりやあしないぞ。」

あくる日は、朝つぱらから、グレーテルはそとへ出て、水をいっぱいはった大鍋なべをつるして、火をもしつけなければなりませんでした。

「パンからさきにやくんだ。」と、ばあさんはいいました。「パンやきかまどはもう火がはいっているし、ねり粉もこねてあるしの。」

こういって、ばあさんは、かわいそうなグレーテルを、パンやきかまどの方へ、ひどくつきとばしました。かまどからは、もうちよろちよろ、ほのおが赤い舌を出していました。「なかへ、はいこんでみなよ。」と、魔女はいいました。「火がよくまわっているか見るんだ。よければそろそろパンを入れるからな。」

これで、もし、グレーテルがなかにはいれば、ばあさん、すぐとかまどのふたをしめて

しまうつもりでした。すると、グレーテルは中で、こんがりあぶられてしまうところでした。そこで、これもついでもりもりやっってしまうつもりだったのです。でも、グレーテルは、いちはやく、ばあさんのほらの中を見てとりました。そこで、

「あたし、わからないわ、どうしたらいいんだか。中へはいるって、どういうふうにするの。」と、いいました。

「ばか、このくそがちよう。」と、ばあさんはいいました。

「口はこんなに大きいじゃないか、目をあいてよくみろよ。このとおり、おばあさんだつてそっくりはいれらあな。」

こう言い言い、やつこら、はうようにあるいて来て、パンやきかまどの中に、首をつっこみました。ここぞと、グレーテルはひとつき、うしろからどんとつきました。はずみで、ばあさんは、かまどの中へころげこみました。すぐ、鉄の戸をびんとしめて、かんぬきをかっしてしまいました。うおツ、うおツ、ばあさんはとてもすごい声でほえたけりました。グレーテルはかまわずかけだしました。こうして、罰ばちあたりな魔女は、あわれなぎまに焼けただれて死にました。

グレーテルは、まっしぐらに、ヘンゼルのいる所へかけだして行きました。そして、犬

ごやの戸をあけるなり、

「ねえヘンゼル、あたしたちたすかつてよ。魔女のばあさん死んじやってよ。」と、さけびました。

戸があくと、とたんに、ヘンゼルが、鳥がかごからとび出したように、ぱあつととび出して来ました。

まあ、ふたりは、そのとき、どんなにうれしがって、首つ玉にかじりついて、ぐるぐるまわりして、そしてほほずりしあつたことでしたか。こうなれば、もうなんにもこわがることはなくなりましたから、ふたりは魔女のうちの中に、ずんずんはいつて行きました。うちじゆう、すみからすみまで、真珠しんじゆや寶石のつまつた箱だらけでした。

「こりや、小砂利こじやりよりずっとまじだよ。」と、ヘンゼルはいつて、かくしの中に入れてくれるだけ、たくしこみました。すると、グレーテルも、

「あたしも、うちへおみやげにもつてくわ。」と、いつて、前掛にいつぱいにしました。

「さあ、ここらでそろそろ出かけようよ。」と、ヘンゼルはいいました。「なにしろ、魔女の森からぬけ出さなくては。」

それで、二三時間あるいて行くうちに、大きな川の所へ出ました。

「これじゃあ渡れやしない。」と、ヘンゼルはいいました。「橋にも、いかだにも、まる
でわたるものがないや。」

「ここには、渡し舟も行かないんだわ。」と、グレーテルがいました。

「でもあすこに、白いかもが一わおよいでいるわね。きつとたのんだらわたしてくれてよ
。」

そこで、グレーテルは声をあげてよびました。

「かもちゃん かもちゃん 小がもちゃん、

グレーテルとヘンゼルが 来たけれど、

橋もなければ いかだもない、

おまえの白い おせなかに のせてわたして くださいな。」

かもは、さつそく来てくれました。そこで、ヘンゼルがまずのって、小さい妹に、いつ
しよにおのりといいました。

「いいえ。」と、グレーテルはこたえました。「そんなにのっては、かもちゃん、とても

おもいでしよう。べつべつにつれてつてもらいますわ。」

そのとおり、このしんせつな鳥はしてくれました。それで、ふたりぶじにむこう岸に渡りました。それから、すこしまたあるくうち、だんだんだんだん、森が、おなじみのけしきになって来ました。そしてとうとう、遠くの方に、おとつあんのこやをみつめました。さあ、ふたりはいちもくさんに、かけだしました。ぽんとおへやの中にとびこんで、おとつあんの首根つこにかじりつきました。

この木こりの男は、こどもたちを森の中に置きざりにして来てからというもの、ただの一ときでも、笑える時がなかったのです。ところで、おかみさんも死んでしまっていました。

グレーテルは、前掛をふるいました。すると、真珠しんじゆと宝石ほうせきが、おへやじゆうころがりだしました。こんどは、ヘンゼルが、かくしに片手をつつこんで、なんどもなんどもつかみだしては、そこにばらまきました。

まずこんなことで、心配や苦勞はきれいにふきとんでしまいました。親子三人それぞれ素晴らしいづくめで、いっしょになかよく、くらししました。

わたくしの話もこれで市がさかえました。ほら、あすこに、小ねずみがちよろちよろか

けていますね。たれでもつかまえた人は、あれで、大きな毛皮のずきんを、ごじぶんでこ
しらえてごらんさい。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日4版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：浅原庸子

2004年6月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ヘンゼルとグレーテル

HANSEL UND GRETEL

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 グリム兄弟 Bruder Grimm

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>